

(論文内容の要旨)

本論文の全体を貫くテーマを一言で言うと「中国詩学の唐宋変革」となる。本論文の標題「中国の詩学認識——中世から近世への転換——」とは、そのような意味で言ったものである。

「中国詩学の唐宋変革」とは、どのようなことを言うのか。先ず「唐宋変革」について確認しておこう。これは、もとは内藤湖南によって唱えられた中国史の時代区分に関する歴史学説であり、中国の社会・文化の唐代から宋代へかけての歴史的な転換を「中世」から「近世」への転換として捉える見方を指して言う。その歴史的転換はさまざまな形で現れているが、特に重要なのは貴族制社会の解体とそれに伴う新たな文人士大夫階層の出現という点である。この歴史変革は文学にも影響を及ぼしている。本論文において考察の対象とするのは、文学、とりわけ詩学認識に現れた唐から宋への歴史的転換の諸相である。

ここで言う「詩学認識」とは「詩についての学問・認識」というような意味で用いる。かつて中国において、詩はどのように受容され、読まれていたか。どのように研究され、論じられていたか。それを現在の我々に伝えてくれるものが、すなわち本論文で考察の対象とする中国の詩学認識である。詩論や詩評、詩文などの文学作品、あるいはその他の多種多様な文献が、かつての中国における詩学認識を我々に伝えてくれている。本論文は、それらの文献資料のうち、特に唐宋期のそれを中心にに取りあげて考察を加えるものである。

本論文は五部十六章から構成される。それぞれの概要は以下の通りである。

第一部「詩における風景と絵画」は、詩および詞（詩餘）に現れた風景と絵画の関係、およびそれに関連する問題について考察する。この第一部の考察は、次の第二部の前提をなすものでもある。

唐宋期の文人たちは、自然の風景を前にして、しばしば「如画（画の如し）」と

言っている。つまり、風景を絵画になぞらえて捉えている。唐から宋にかけては、山水画が発達を見せた時代である。それに伴って、文人たちの風景を見る眼差しの中に山水画の枠組みが浸透してゆく。それが、この「如画」という言い方となって現れたものと考えられる。第一部第一章『天開図画』の系譜——六朝より宋代に至る風景認識」は、六朝、唐、宋代の詩を通して、この種の風景把握の形成・発展過程を追跡し、そこに現れた風景認識・自然認識の特質について考察する。

第一章は詩に現れた風景把握について考察するものだが、晩唐五代期に至って数多く書かれようになる詞（詩餘）についてはどうか。晩唐五代の詞には、いわゆる閨怨を主題として女性の居る閨房内の情景をうたった作品が多い。注目されるのは、そうした作品にうたわれる閨房の中には、しばしば山水の風景を描いた「画屏」すなわち絵屏風が置かれていることである。第二章「閨房の中の山水、あるいは瀟湘について——晩唐五代詞における風景と絵画」では、山水画の「画屏」が設置された閨房をうたう晩唐五代の詞を取りあげ、そこに現れた風景認識・絵画認識について、閨怨の主題との関連を中心に考察する。

第二部「詩と絵画」は、詩と絵画という二つの藝術ジャンルの関係、およびそこに現れた詩学認識について考察する。

宋代には詩と絵画の関係は極めて密接なものとなる。それに伴って、いわゆる詩画比較論・詩画同質論、すなわち詩と絵画を比較し、両者の間に同質性を認める詩学認識が成立する。北宋の蘇軾が述べた「詩中有画（詩中に画有り）」は、その種の認識を代表する言葉である。では、いったい「詩中有画」に代表される宋代の詩画比較・同質論はどのような特質を持つのか。この問題について第二部第一章『詩中有画』をめぐって——宋代における詩と絵画」は、中国の詩画比較・同質論全体を視野に入れながら考察を加える。この第一章の考察は、第二章および第三章の前提をなすものである。

「詩中有画」もしくはそれに類する詩学認識が、宋代に至って突如として成立したとは考えにくい。宋代以前に、それを準備するような動きがあったと考えるのが自然である。「詩中有画」の詩学認識は、どのようにして形成されていったのか。

第二章「『詩中有画』と『宛然在目』——六朝・唐代における詩と絵画」は、「宛然在目（宛然(さなが)ら目に在り）」の詩学認識、すなわち詩に映像世界の再現・伝達の機能を認める認識と関連づけながら、六朝および唐代に遡って詩画比較・同質論の形成過程を考察するとともに、その形成過程において中唐という時代が重要な画期となっていたことを明らかにする。

詩画比較・同質論の形成過程を宋代以前に遡って追跡するとき、特に気づかされるのは六朝および唐代前期の詩画比較・同質論と宋代のそれとの間に横たわる断層すなわち非連続面である。第三章「『詩中有画』と『著壁成絵』——詩画同質論の唐宋変革」は、同じ盛唐の詩人王維の詩について宋の蘇軾が述べた「詩中有画」と盛唐の殷 が述べた「著壁成絵（壁に著(つ)きては絵を成す）」という二つの評語を取りあげ、両者の間に現れた「唐」と「宋」の詩学認識上の非連続面を明らかにする。

第三部「詩と現実」は、詩と現実（外部世界）との関係、詩における言葉と物との対応関係をめぐる詩学認識について考察する。

第二部第一章および第二章にも述べるように、詩画同質論の成立は同時に次のことを意味している。すなわち、詩は絵画と同様の映像メディアとしての機能を備えており、遠く時空上の距離を超えて映像を読み手のもとに送り届けることを可能にするとの詩学認識が成立していたことを。唐代になると、遠く離れた地にある詩人どうしの間で交換される詩が増加する。第三部第一章「距離と想像——詩とメディア、メディアとしての詩」は、この距離を隔てての詩の交換という現象に着目して、詩に映像メディアとしての機能を認める認識が形成されてゆく過程、およびそれに関連する問題、特に詩の受容における「想像」をめぐる問題について考察を加える。

中国の文学論にあって、詩における映像の再現・伝達の機能は「形似」と呼ばれた。第二章「『形似』の変容——言葉と物の関係から見た宋詩の日常性」は、六朝および唐代の「形似」論と宋代の「形似」論との違いに着目し、そこに現れた詩学認識の変容、特に詩の言葉と現実の事物との対応関係をめぐる詩学認識の変容が持つ意味について考察する。それによって、宋詩の一大特色とされる「日常性」なるものの背後に横たわっていた言語表現のあり方の一端を明らかにする。

宋代には、いわゆる「著題」をめぐる議論、すなわち詩の本文と標題との対応関係をめぐる議論が盛んになる。これは、第二章に取りあげた「形似」論と密接に関わっている。第三章「標題の詩学——宋代の『著題』論とその系譜」は、宋代の「著題」論に現れた詩学認識の特質を、六朝および唐代における標題論を視野に入れつつ考察する。

第四部「詩と歴史、詩と作者」は、詩と歴史記述・歴史学との関係およびそれに関する詩学認識、あるいは詩における作者、詩と作者の関係をめぐる詩学認識について考察する。

宋代には「詩史」説が盛んに議論されるようになる。「詩史」とは「詩」による「史」、「史」としての「詩」を意味するタームである。ここには、詩を一種の歴史記述として捉え、読み解こうとする詩学認識が現れている。この種の認識を、本論文では「文学の歴史学」と呼ぶ。また、宋代には「詩史」説が盛んに論じられる一方で、詩人年譜が数多く編まれるようになる。編年形式による詩文集の編纂と連動する形で。詩を「編年」という原則のもとに秩序づけようとするこれらの著作に現れているのも、一種の「文学の歴史学」と言えよう。第四部第一章「文学の歴史学——宋代における詩人年譜、編年詩文集、そして『詩史』説」は、「詩史」説や詩人年譜・編年詩文集を取りあげ、そこに現れた宋代の「文学の歴史学」の特質について考察を加える。

「文学の歴史学」は、詩の受容・解釈における歴史主義（historicism）の問題とも密接に関わっている。第二章および第三章は、唐宋期の詩の受容・解釈に現れた歴史主義の問題を扱ったものである。いわゆる歴史主義において、最も重要なキーワードとなるのはコンテキスト（context）であろう。歴史主義的な作品解釈を支えているのは、作品（テキスト）をコンテキストの中に位置づけて読解・解釈すること、すなわちコンテキスト化（contextualization）であると言っても過言ではない。このような視点から、第二章「詩と『本事』、『本意』、ならびに『詩識』——作品の受容・読解過程におけるテキストとコンテキスト」は、詩の「本事」すなわち作詩の背景を記した筆記小説の言説を取りあげ、詩の受容・解釈におけるテキスト

とコンテキストの関係をめぐる問題について考察を加える。また、第三章「作者の夢、読者の夢——宋代における詩の解釈学」は、過去の作者が後世の読者の夢の中に現れる物語の言説を取りあげ、詩の解釈・受容における歴史主義の問題と関連づけながら考察を加える。

この第四部において最終的に浮上するのは、作者とは何か、すなわち中国の詩学認識における作者概念をめぐる問題であると言ってもいいだろう。そこで第四部には、宋代における文集(別集)の編纂について考察する第四章「『焚棄』と『改定』——宋代における別集の編纂あるいは定本の制定」を加えた。唐から宋へと至る時期には、文人たちが自らの文集を編纂すること、言い換えれば自らの作品の「定本」を制定することに対して自覚的になる傾向が見られる。この点に関連して、ここでは特に「焚棄」と「改定」という行為を取りあげて考察を加える。それによって、作者と作品の関係のあり方の一端を明らかにするとともに、作品の「定本」なるものの性格について若干の私見を提示する。

第五部「詩における〈内部〉と〈外部〉、〈自己〉と〈他者〉」は、詩人の内部世界と詩人を取り巻く外部世界との関係、詩人自身とそれ以外の他者との関係をめぐる詩学認識について考察する。

中国の文人たちは、自己の〈内部〉と〈外部〉、あるいは〈自己〉と〈他者〉の関係をどのように捉えていたのか。また、こうした視点から宋代の詩学を見るとき、そこにはどのような特質が認められるのか。第五部は、このような問題について考察を加える。ここで特に取りあげるのは、詩における典故の使用、および詩と外界(自然)との関係をめぐってなされた議論である。これらの議論を取りあげるのは、そこにおいて〈内部〉と〈外部〉、〈自己〉と〈他者〉の関係をめぐる問題が最も端的な形で問われていると考えたからである。

第五部第一章「詩はどこから来るのか、それは誰のものか」は、第五部で取りあげる諸問題について包括的な考察を行うものであり、次の第二章および第三章の前提をなすものでもある。宋代の詩学においては、北宋の黄庭堅らが唱えたいわゆる「点鉄成金」「換骨奪胎」をめぐる議論に代表されるように「用事」、「使事」すな

わち典故の使用が重要な論点となっていた。典故の使用とは、言い換えれば〈他者〉の言葉を〈自己〉の作品に取り入れて活用することである。第一章では特にこの点を中心に取りあげて考察する。合わせて、それらの議論と〈貨幣〉〈商品〉〈資本〉といった経済学的な諸問題との関連についても若干の私見を提示する。

〈内部〉と〈外部〉、〈自己〉と〈他者〉の関係をめぐる問題は、作品の帰属あるいは作品の所有権をめぐる問題にも密接に関わってゆくと考えられる。第二章『『夢中得句』をめぐって』は、「夢中得句（夢中に句を得）」という作詩のあり方を取りあげて考察を加えることにより、六朝より宋代に至る時期の、作品の帰属・所有をめぐる詩学認識の系譜の一端を明らかにする。

宋代文人の発言の中には、詩を「拾得」とするという言い方が数多く見られる。また、「詩本」「詩材」「詩料」といった「詩の素材」を意味するタームも数多く用いられるようになる。〈内部〉と〈外部〉、〈自己〉と〈他者〉の関係をめぐる問題について考えるうえで、極めて興味深い現象と言える。第三章「詩を拾得すること、ならびに詩本、詩材、詩料——楊万里、陸游を中心に」は、南宋の陸游、楊万里の詩を例に挙げながら、こうした現象について考察を加える。それによって、詩と外界（自然）との関係をめぐる宋代文人の認識の特質を明らかにする。

最後に附した第四章『『売詩』、『売文』ということ』は、第一章に触れた「売詩」「売文」をめぐる問題について、六朝および唐代を視野に入れる形で補足的な考察を加える。これにより「近世」という時代において新たに形作られていった文人の自己認識の特質を明らかにする。

唐から宋へと至る過程で、中国の詩学認識の枠組みは大きく転換した——本論文の結論を一言で言うならばこのようになる。しかし、本論文は「変革」という非連続面にのみ眼を向けるのではない。唐から宋にかけて詩学認識は大きく変わったが、その一方で変わることなく維持されたものも多い。唐から宋への詩学認識の「変革」を考察するに際しては、その連続面にも眼を向ける必要があるだろう。実際、本論文の考察を通してあらためて確認された連続面は少なくない。それらを前提とすることによって、「変革」の内実はよりの確に理解されると考えられる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は論者がこの二十年近くの間公表してきた論文をもとに、改めて一冊の書物として書き下ろし、体系化したものである。このことは、論者のここに至る個々の多様な研究が一つの大きな問題によって貫かれていたことを示している。その一貫する問題を論者は「中国の詩学認識」という、ややこねない言葉によってあらわし、それを書名としているが、言い換えれば、中国において詩はいかなるものとして受け止められてきたかという問題にはかならず、副題に「中世から近世への転換」というように、内藤湖南の唐宋変革論をもとに、唐代と宋代の間の大きな質的転換を明らかにしたものである。

詩とはどのようなものと受け止められてきたか——その問いをめぐって論者は第一部「詩における風景と絵画」、第二部「詩と絵画」、第三部「詩と現実」、第四部「詩と歴史、詩と作者」、第五部「詩における〈内部〉と〈外部〉、〈自己〉と〈他者〉」という五部に分けて異なる視点から考察を加える。この表題を見るだけでも論者の視点の斬新さが予想できよう。従来、こうした角度から中国の詩が論じられることはまずなかった。しかもそれは借り物の理論を振りかざしたものではなく、論者自身の内発的な問題意識から発し、従来の研究の蓄積を謙虚に吸収しながら、己れの論を構築したものである。

第一、第二部では詩と風景、絵画との関わりを考察する。風景を見て絵のようだと言ったり、また逆に風景画を見て本物のようだと言ったりする、日常化しているが考えてみれば奇異な言い方、そこから出発してそうした見方がどのように形成されてきたかを追跡する。絵画の発展によって絵画が風景の代替物とされるようになったのが、中晩唐に至ると「仮」である絵画を「真」なる実景よりも上位とする見方が生じ、そこから絵画を通して自然を見るという態度が生まれる、といった詩と風景・絵画との関係の変化を明らかにする。

第三部「詩と現実」では「距離と想像」という章を設け、メディアという視点か

ら詩の受容と受容の変容を説く。見たことのない風景を詩を媒介として想像する——絵画が早くからそうした機能を備えていたのに対して、詩がそれを担い、自覚するようになるのは、宋代に入ってからである、とそこに至るプロセスを追跡している。そこからさらに詩における「形似」の問題に進み、物と言葉とが文学の規範のなかで安定した関係をもっていたのが、宋代には揺らぎ始め、詩が対応する現実が多様なものであるとする認識に変化していくことを説く。

第四部では宋代には文集が編年によって編まれる方向に傾くこと、文人の年譜が作られるようになること、それが文学の捉え方そのものの変化に対応して生まれてきたことを論じる。文学を作者の人生、作者の時代の中において捉えるという今日にも流れている見方は宋代に発していると論じる。

第五部では、詩は作者の内面が表現されたものであるとする中国の伝統的な詩観を考え直し、外部の自然が材料を供給する、あるいはまた他者の表現が加工されて別の表現に生まれ変わる、そうしたことが宋代には積極的に語られ、作品を作者個人のものとする見方も揺らいでいくことを証する。

如上の様々な相における変容が、唐宋変革期に出現すること、詩の捉え方の大きな変化が宋代に生じること、それを長いスパンにわたって資料を広範、且つ緻密に渉猟しながら明らかにしたものである。唐宋の変化を見るに際しても、それ以前に徐々に形成されていく過程を論者は仔細に追跡している。かつての中国古典文学研究は、作者の研究——それも伝記研究に偏り、それがようやく作品の研究へと広がってきたが、論者の立場はさらに進んで、詩を受け取る側も含めて、詩なるものを総体として捉えようとするのであって、明らかに従来の態度とは一線を画している。中国古典文学研究に鮮烈な刺激を与える、記念碑的な論文であると称しても過言ではないだろう。

新たな視点からの考察でありながらも、従来の研究の蓄積を丹念に丁寧に網羅していること、七百頁を超える大著にほとんど遺漏、誤謬がないこと、それは論者の研究者としての緻密さをよく示し、新奇さを振りかざす体のものでないことも評価されなければならない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年11月27日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。